

池田徹郎博士の逝去を悼む

鏑 木 政 岐

昭和56年10月2日、日本測量協会の30周年記念式典に出席していたとき、緯度観測所長坪川家恒氏から、今朝未明池田氏が逝去されたという悲しい知らせを受けた。私と池田氏とは昭和38年の春、相前後して天文学の第一線を離れたので、その後お会いする機会は極めて少なくなった。昭和49年10月15日に緯度観測所開設75周年の記念式典に出席したとき、池田氏は非常に元気であられたので、まさかこんなに早く他界されるとは夢にも思わなかった。最近戴いた奥様の手紙によれば、昭和53年暮に胃の一部の摘出手術を受けられ、約2年後の昭和55年夏に胆のうの手術を受けられたが、その後は元気になられたそうである。ところが、昨年8月末に再入院されて療養中であったが、約1カ月後に不帰の客となられたのである。ここに謹んで池田氏の逝去に対し心から哀悼の意を表しあげたい。

池田氏は島根県簸川郡斐太町の出身で、昭和11年に京都大学理学部物理学科卒業後、直ちに緯度観測所に就職され、40有余年の長きに亘って、前半は気象課長として緯度観測と密接不可分の関係にある上層気流の観測及び研究に従事され、後半は緯度観測所長として観測所の発展に止まらず国際協同緯度観測事業の進歩発展に貢献されたのである。

19世紀末ごろまでは、地球の自転を利用して決定した地球上の経度・緯度の値は不変であると考えられていた。ところが、1858年にキュスナー(独)は経度差が約180°離れたベルリン(独)とホノルル(ハワイ群島)での緯度観測値の様相が対称的に変化していることに気がついた。その結果、地球内部の自転軸の変動によって緯度変化の起こることがわかった。次いでチャンドラー(米)も緯度変化の様相を研究した結果、緯度変化には1年周期のほかに1.2年(約14カ月)周期(チャンドラー周期)の変化のあることがわかったのである。

このように地球内部における自転軸の変動(すなわち

極運動)によって起こる緯度変化を観測するために、1899年末から北緯39°8'の同一緯線上に水沢を含めて世界に6カ所の観測所を設け、タルコット法に基づいて、子午線上で天頂の南北にそれぞれ天頂距離のほぼ等しい一対の恒星(対星という)の天頂距離の差を天頂儀によって精密に観測する国際協同緯度観測事業が発足し、それが現在に至るまでも継続されているのである。ここで同一の緯度線上に6カ所の観測所を設けた理由は、同一の対星が利用できるからであり、また子午線上で天頂の南北に天頂距離のほぼ等しい対星を選定したのは大気差の影響がほぼ等しいと考えられるからである。

国際協同緯度観測事業が開始されて以来、今日まで x 、 y で表わされる地軸の変動に伴う極運動の動きが決定されているが、その値は地球の平均北極のまわりに0'ないし0'5(距離にして0~15メートルの程度)である。従って如何に精密な観測の要求されるかがわかる。国際協同緯度観測が実施されてから数年後、木村栄博士は極運動に無関係で、しかもすべての観測所に共通な成分 z 項を発見した。 z 項は発見者の名に因んで木村項とも呼ばれている。

ところで、タルコット法では、子午線上で天頂の南北に天頂距離がほぼ等しい対星を選定して大気差の影響が等しいと仮定したが、実際には上層気流の影響などによって各観測所に固有な局地的成分があるはずである。池田氏は昭和27年に「水沢における上層気流の統計的研究並びにその緯度変化との関係」と題する学位論文を東京大学に提出して理学博士を取得されたが、これは極運動とは無関係な水沢観測所に固有な局地的成分に関する研究であって、いわば池田氏が過去20数年に亘り観測研究された努力の結晶と見るべきものである。

最後に池田氏の豊かな学徳を偲びながら故人の霊の安らかならんことを祈る次第である。